

2017年8月15～16日 ⑦ 16日10:00現在

戦後72年 声・主張、記録

戦禍の傷、受け止め記す＝「平和のバトン次世代に」－東京大空襲生存の作家



東京大空襲と平和への思いを語る作家の早乙女勝元さん＝1日、東京都足立区

「平和のバトンを次世代につなぐ」。約10万人が命を落としたとされる東京大空襲を生き延びた作家の早乙女勝元さん（85）は、72回目の終戦記念日を迎えた夏も「戦争の傷痕」を記録し続けている。

12歳だった1945年3月10日未明、焼夷（しょうい）弾の雨と猛火の中を家族5人で逃げ惑った。自宅のあった墨田区や、江東区、台東区を中心とした下町は、約2時間半の集中的な空襲を受け一晩で焦土と化した。路上と川は学友や近所の人らの遺体であふれた。

「お前さんは生き残らせてやるから、亡くなっていった俺たちのことを伝えてくれ。死者から使命を課せられた気がした。

終戦は焼け落ち崩れかけた自宅で迎えた。帰宅した母親から「戦争が終わったよ」と告げられた。「生きて平和を目にするとは夢にも思わなかった。これからの人生が戦争に関与せず開けていくのがうれしかった」と振り返る。

しかし、朝鮮戦争やベトナム戦争と戦禍は絶えず、国内は特需景気に沸いた。そんな中で、「戦後の原点に立ち返ってほしい」と書いた自伝が20歳のときに出版された。



東京大空襲・戦災資料センターの特別企画で、小中高生ら約115人を前に「命と平和の大切さを学んでほしい」と戦争体験の継承を訴える早乙女勝元さん＝12日、東京都江東区

71年には東京大空襲を経験した8人から聞き取りを行ったルポルタージュ「東京大空襲」を執筆。夫と12人の子どもを失った母親、両親を亡くし13歳で孤児となった

男性、目の前で家族6人が焼け死んだ女性。つらすぎる記憶に口を閉ざしてきた下町の人たちを訪ね、説き伏せ、記録した。

著書は150冊を数え、2002年には江東区北砂に「東京大空襲・戦災資料センター」を設立し館長に就任した。今でも聞き取りを続け、毎日机に向かう。全国で講演をするため体力維持にも励んでいる。

早乙女さんを突き動かすのは、「戦争はまっぴらごめん。子どもや孫たち、次の世代に平和のバトンを手渡さねば」という強い思いだ。命ある限り10万の「声なき声」に寄り添う。（時事通信 2017/08/15-14:26）

曾祖父に「ありがとう」＝献花の15歳、祖母と参列－終戦記念日



全国戦没者追悼式を前に、取材に応じる青少年献花者の佐藤真樹さん＝15日午前、東京都千代田区の日本武道館

曾祖父に感謝の気持ちを込め、黄色い菊の花をそっと供えた。東京都千代田区で営まれた全国戦没者追悼式で献花した高校1年佐藤真樹さん（15）＝福島県会津若松市＝。戦争を経験していない自分が平和を語るのには気が引けるが、命懸けで戦い死んでいった曾祖父らに「ありがとう」と伝えた。



全国戦没者追悼式に参列し、戦死した父親の遺影を手にする佐藤恵子さん＝15日午前、東京都千代田区の日本武道館

「戦争の時は米粒一つも大事だったんだよ」。佐藤さんは、同居する祖母の恵子さん（78）に戦争について聞かされ育った。だが、曾祖父の戦死を知ったのは式典への参加が決まった今年5月だった。

郵便局員だった曾祖父の金上豊さんは、1944年春ご

ろに出征。陸軍独立歩兵309大隊に所属し、翌45年3月17日に硫黄島で戦死した。31歳で、遺骨は帰ってこなかった。

恵子さんは孫の佐藤さんに、物静かだった父親との思い出を話した。一緒に食べた天井がおいしかったこと、出征を見送った時は「もしかしたらこれが一生の別れになるかも」と思ったこと。

佐藤さんは「ひいおじいちゃんのように、日本のために戦った人たちがいて今の私たちがいるんだと思った」と話す。式典に参列した4998人の遺族の姿に、戦争の与えた影響の大きさを実感した。

献花台に花を手向け、「ありがとう。これからの日本は任せてね」と語り掛けた佐藤さん。会場で見守った恵子さんも「戦争は普通の生活を壊す。孫たちの世代にも語り継いでほしい」と父親の遺影を抱きしめた。(時事通信 2017/08/15-17:03)

「あの汽車で」復員思う日々＝沖縄で夫戦死、最高齢芹ヶ野さん－終戦記念日



一人息子の芹ヶ野憲一さんを抱っこする父博さん（憲一さん提供）

遺族で最高齢参列者となった東京都練馬区の芹ヶ野春海さん（101）は、夫の博さんを沖縄戦で亡くした。終戦時2歳だった一人息子の憲一さん（74）には気丈だった春海さん。汽車を見ては復員する夫の姿を思い描いていたという。

博さんは大戦末期に編成された第32軍に召集され、通信兵の曹長として従軍。組織的抵抗が終わったとされる翌日の1945年6月24日、本部町で戦死した。31歳だった。

出征する兵士に渡す「慰問袋」が縁で結婚した。春海さんは「もう忘れちゃった」と薄れる記憶に苦笑するが、憲一さんにとって戦後、汽車で茨城県筑波町（現つくば市）の郷里から重さ数十キロの米袋を担ぎ、行商で東京に向かう母の姿は今も鮮明だ。愚痴一つ聞いたこともない。米袋を没収した警官に「息子を育てるコメだ」とたんかを切って取り返したこともある。ただ「あの汽車で帰ってくればいいなと、いつも思っていたようだ」と憲一さんは明かす。



戦時中に撮った家族の写真を見て「これ誰」と聞く芹ヶ野春海さん（左）に、「俺だよ」と笑って答える長男の憲一さん＝10日午前、東京都練馬区

父の記憶はないが、部隊長が母に宛てた手紙を数年前に初めて目にした。

「博様は腹部と胸部に数発負傷しながら手りゅう弾を投げ、二発目で自ら手りゅう弾を腹に抱いて自決されました」

月夜に3人を率い、くぼ地に身を潜めては包囲網突破を何度も決行する父の姿。4度目に機銃掃射を受けて被弾し、連合国軍の去った後に部隊長らの手で埋葬されたことがつづられていた。常に胸に抱いていた「坊やの写真」は見つからなかったとも。

読み進むうち「涙が出てきてたまらなかった」。これまで春海さんを連れて慰霊に2回赴いた。父の眠る地はやぶがうっそうと茂っていた。

追悼式は春海さんにかんがが見つかったことなどを機に2年前から参列。「72年前は『終戦』ではなく『敗戦』。日本人だけで300万人も犠牲になり、世界中で何千万人が迷惑を被った。戦争がないことを祈りたい」と語る憲一さん。これからも参列を続けるという。



インタビューに応じる全国戦没者追悼式の遺族代表・渡辺一さん＝14日午後、東京都中央区

◇「平和かみしめて」＝遺族代表の渡辺さん

福岡県豊前市の渡辺一さん（83）も、父博利さんを1945年7月にビスマルク諸島のラバウルで失い、戦後を母千代さんと2人で生き抜いた。遺族代表としての追悼の辞について「二度と戦争をさせてはいかんという強い気持ちを込めた。72年の平和をかみしめたい」と話した。

渡辺さんは父が召集される直前の43年の初夏、母の古里、佐賀を親子3人で訪ねた3泊4日の旅が忘れられない。「父と母の仲むつまじい様子がうれしかった。佐世保の海軍に入隊が決まっていた父も母もこれが最後の別れとの思いがあったのかもしれない」と振り返る。

カジカガエルの鳴く清流で父と遊び、魚を釣った。トランクに入れたカルピスの瓶が割れ、衣服がベトベトになっ

た記憶も懐かしい。

「戦病死」の公報があったのは終戦翌年の夏。白木の箱を母と迎えに行った。中には短冊1枚。「母は信じたくなかったのでしょう。ラバウルからの復員者がいると聞いては訪ね、ラジオで流れる尋ね人に耳を澄ましていた」という。

同じ海軍病院にいた人から死の事実を聞かされ、ようやく納得し仕事に奮闘。親戚と開いた飲食店は繁盛したという。その母も65年に50代の若さで他界した。

初めて現地を慰霊に訪れたのは90年。碧い海が美しかった。「父の肩におぶってもらったような気持ちになり、ようやく迎えられた気がした」。石を持ち帰り、不戦の決意を一層強くした。(時事通信 2017/08/15-11:11)

元米兵が遺族に日章旗返還＝日本兵の「最期」伝える－岐阜



元米海兵隊員マービン・ストロンボさん(右)から日章旗を手渡される遺族の安江辰也さん＝15日午前、岐阜県東白川村

元米海兵隊員が太平洋戦争の激戦地サイパン島から持ち帰った戦死した日本兵の日章旗を遺族に返還する式典が15日、岐阜県東白川村で行われた。来日したマービン・ストロンボさん(93)は涙ぐみながら日章旗を遺族に直接手渡し、最期の様子を伝えた。

この日本兵は東白川村出身の安江定男さん＝当時(25)＝。式典で、ストロンボさんが「武運長久」の文字と約180人の寄せ書きが記された日章旗を定男さんの弟辰也さん(89)に手渡すと、辰也さんは顔をうずめた。

ストロンボさんは「時間がかかってしまい、申し訳ない」と謝罪。定男さんの最期について「傷もなく、安らかに眠っているかのような様子だった」と振り返った。

辰也さんは「兄の肌の匂いがするような気がする。当時のままに保管していただき、本当にありがとう」と声を震わせた。2人は最後にしっかり握手した。

ストロンボさんは1944年6月にサイパンへ上陸。戦死した定男さんが身に付けていた日章旗を持ち帰り「いつか遺族に返したい」と自宅に70年以上保管していた。今年3月、ストロンボさんの娘が日本兵の遺品返還活動を行っている米国のNPOに連絡。返還が実現した。(時事通信

2017/08/15-12:29)

「戦争体験、今の世代に」＝ゼロ戦搭乗員の映画制作一元民放ディレクター



ドキュメンタリー映画「原田要 平和への祈り－元ゼロ戦パイロットの100年」の監督を務めた宮尾哲雄氏＝7月24日、長野県須崎市

太平洋戦争中、ゼロ戦に搭乗し、多くの敵機を撃墜した名パイロット・故原田要さんの証言を記録したドキュメンタリー映画がこのほど作られた。監督を務めたのは、長野県の民放で番組制作や報道に携わってきた宮尾哲雄さん(67)。終戦から72年。宮尾さんは「戦争の悲惨さを語る原田さんの姿を伝えたい」と語る。

映画「原田要 平和への祈り－元ゼロ戦パイロットの100年」は、25日まで長野市の映画館で上映される。口コミなどで評判を呼んでおり、全国上映も検討するという。

原田さんは旧日本海軍のゼロ戦パイロットとして真珠湾攻撃やミッドウェー海戦に参加した。戦後は沈黙を守ったが、経営する幼稚園の園児が湾岸戦争の映像に「花火みたいできれい」と言ったことに衝撃を受け、75歳から講演や執筆を開始。2016年5月に99歳で亡くなるまで全国で講演を続け、体験を語った。



ドキュメンタリー映画の撮影でインタビューに応じる元ゼロ戦パイロットの故原田要さん(宮尾哲雄監督提供)

2人の出会いは、宮尾さんが講演会に足を運んだ14年9月。原田さんは2時間立ったまま自身の体験を話し、最後は体力を使い果たして倒れてしまった。その気迫に圧倒されたという宮尾さんは、「当時を生きた人にしか分からない話を今の世代に伝えたいという思いが、ひしひしと伝わってきた」と振り返る。

宮尾さんはその後、原田さんの体験談を記録するためカメラを回し始めた。撮影期間は2年半。亡くなる数カ月前、原田さんに映画化の決意を伝えると、「体力的にもう講演はできない。映画という形なら全面的に協力する」と言って

くれたという。

映画は原田さんの証言をベースに、同時代を生きた人の話や時代背景を織り交ぜ、波乱に満ちた生涯を描き出した。撃墜するため至近距離へ迫った敵機パイロットの悲痛な表情に、原田さんが「君を殺さなければ俺がやられるという思いだった」と吐露する場面も。

体験を語り続けた原田さんの真意を、宮尾さんは「戦争が起きないような方策をなんとか考えてほしいという私たちへの宿題。歴史から学んでほしいという思いだったので」と推察する。戦争の実相を知る人が減る中、「平和の尊さを知ると同時に、どうやって保てるのかを考えてほしい」と願っている。(時事通信 2017/08/15-07:14)
《時事通信 原田要インタビューは別項》

きょう終戦の日 平和の理想、まだこれから

東京新聞 2017年8月15日 朝刊

きょう十五日は七十二回目の終戦記念日。戦没者の霊を慰めるだけでなく、過酷な戦争体験を継承し、平和をつないでいく決意を新たにする日でもある。旧満州（現中国東北部）から引き揚げてきた作家で作詩家のなかにし礼さん（78）と、英文学者の小田島雄志（おだしまゆうし）さん（86）が、この国に対するそれぞれの思いを語った。



◆作家・作詩家 なかにし礼さん

なかにしさんは、引き揚げで「国家に三度捨てられた」と述懐した。日本軍に置き去りにされたからで、「戦時は国家の正義という論理で個人が抹殺される」と強調。戦争の犠牲から生まれた憲法を「最高の芸術作品。その理想はまだ実現されていない」と語った。

終戦直前、ソ連軍が満州に侵攻するや日本軍の現地部隊は避難列車で去った。「国を守るべき軍人がいち早く国民を捨てる光景」を目の当たりにし、当時六歳ながら「軍人への夢や希望は崩壊した」という。

その列車に、日本人の開拓民が「病人だけでも乗せてくれ」と押し寄せ、貨車にしがみついた。なかにし少年たちは最後尾にいて、軍刀を手にした将校から「(開拓民らの)指を振り払え」と命じられた。「はがされる人の指の感触も、顔も覚えている」と心身に罪の意識が刻み込まれた。

そのうえで「あの戦争でアジア全体で二千万人以上が亡

くなった。大変な犠牲を払い、ついに手に入れたのが日本国憲法」と言及。憲法について「奇跡的な、最高の芸術作品。戦後日本の、世界に向けた再出発の宣言書だ」と表現した。

戦前の軍国主義に「美しい日本」を求める昨今の風潮を危ぶむ。「軍国主義がどれだけの人を苦しめたか。愚かな戦争でどれだけ若者が無駄死にし、飢え死にしたか。過去を忘れるのが早すぎる」と嘆く。そして「日本の理想はまだ実現されていない。この憲法のもとにこれから実現すべきだ」と訴えた。

〈なかにし・れい〉 1938年9月、中国黒竜江省（旧満州）牡丹江市生まれ。作家、作詩家。日本レコード大賞を「天使の誘惑」「今日でお別れ」「北酒場」で3度受賞。小説『長崎ぶらぶら節』で直木賞。2012年、食道がんであることを公表した。著書に『夜の歌』『天皇と日本国憲法』『生きる力』など。



◆英文学者・小田島雄志さん

本日掲載の「平和の俳句」の作者、小田島さんは、「ハムレット」をはじめとするシェークスピアの戯曲の翻訳を手掛けた一方、演劇評論家としても活躍し、アカデミズムと芝居の懸け橋となった。その若き日に、胸に熱く抱いた言葉がある。「母國」一。それは、旧満州に生まれ育った小田島さんが敗戦後、日本へ引き揚げの中でこみ上げてきた憧れを象徴する言葉だった。

「五族協和」をスローガンに、日本人や満州人など多くの民族が協調する国づくりを目指したとされる満州だったが、日本人が優位にある現実、少年だった小田島さんの目にも明らかだった。満州人の友だちとの間で感じる心の隙間。日本へ帰れば同じ日本人同士、心を開いて人間的な付き合いができるという夢が小田島さんにはあった。

ところが、その憧れの母国で夢は破れた。

〈おだしま・ゆうし〉 1930年旧満州・奉天（現瀋陽）に生まれ、新京（現長春）に育つ。東京大大学院修士課程を修了。同大学で教授を務め、現在は名誉教授。66～70年には文芸部員として文学座にも所属した。80年にシェークスピアの全戯曲37本を完訳。95年紫綬褒章を受章、2002年文化功労者に選ばれた。

戦争二度と繰り返さない 札幌 平和のつどい歌で訴え
北海道新聞 08/15 09:54



平和を願う歌「INORI」を披露した佐々木祐滋さんとHBC少年少女合唱団

戦争の記憶を語り継ぎ、平和の尊さを訴える「札幌市平和のつどい」が14日、同市中央区の札幌駅前通地下歩行空間で開かれた。広島市の平和記念公園に立つ「原爆の子の像」のモデルとなった故佐々木禎子さんのおいで、シンガー・ソングライター佐々木祐滋（ゆうじ）さん（47）＝東京在住＝らが歌や音楽を披露し、平和を願った。

つどいは、札幌市が1992年の平和都市宣言以来、毎年開いている。

祐滋さんは、禎子さんが広島で被爆し、白血病を発症、病床上で千羽以上の鶴を折り、12歳で亡くなった経緯を紹介した。禎子さんが作った1円玉より小さな折り鶴を日本や米国に寄贈する活動に取り組む祐滋さんは「憎しみからは憎しみしか生まない。戦争、原爆を知らないわれわれの世代は、悪は『戦争』だと、憎しみを断ち切らなければいけない」と訴えた。

祐滋さんが作った歌「INORI（いのり）」では、HBC少年少女合唱団の20人も一緒に「二度と二度とつらい思いは誰にもしてほしくない」と、禎子さんの思いを歌詞に込めて歌った。（相川康暁）

<終戦記念日>帰還しない仲間 病に倒れた友 戦争体験元兵士に聞く

河北新報 2017年 08月 15日 火曜日



豊田力男さん



佐藤政敏さん

8月15日は終戦記念日。玉音放送が太平洋戦争の終わりを告げて72年となる。満州事変から日中戦争、太平洋戦争と突き進み、泥沼化する戦況に人々はいや応なく巻き

込まれた。元兵士で仙台市太白区の豊田力男さん（93）、宮城野区の佐藤政敏さん（91）に市内で戦争体験を聞いた。

◎海戦、自分の命は自分で守るしかなかった／無職 豊田力男さん（93）

宮城県丸森町の出身で、16歳で志願して横須賀海兵団に入団。1941年8月に航空母艦「翔鶴」に整備兵として乗り組みました。見上げるほど大きな船で、この船に命を託すのかと思ったのを覚えています。

九州沖で訓練をしていた時、急に金華山沖への参集が命じられました。「(米国ハワイの)真珠湾奇襲作戦に向かう。諸君の命は艦長が預かる」と艦長に言われ、びっくりしましたね。12月8日朝は暗い中、1次飛行隊が出撃。全て無傷で戻ってきました。でも2次隊は総攻撃を食らい、機体に穴が開いていました。

国民は大戦果だと喜んだが、米国の被害は古い艦船ばかりで空母は無傷。海軍内には負け戦の始まりだとの声がありました。空母が打撃を受けていたら、戦況は変わっていたかもしれない。

珊瑚海海戦や南太平洋海戦にも参戦しました。敵機が来ると甲板を逃げ回り、仲間は格納庫へ。焼夷（しょうい）弾が格納庫の鉄壁を貫き、みんな死んでしまった。誰も自分のことで精いっぱい。自分の命は自分で守るしかないとつくづく思いました。

◎ラバウルでマラリアに苦しむ／無職 佐藤政敏さん（91）

東京出身です。志願しなくても引っぱりされると分かっており、1942年に横須賀第2海兵団に志願。整備兵の訓練を受け、第501海軍航空隊でラバウル（パプアニューギニア）に行ったのが43年10月です。

班で2機の整備を任されましたが、空襲でやられ、残り1機は出撃し帰らない。担当する飛行機がなくなり、本隊がトラック島に移った後は農耕作業と軍事訓練ばかりの毎日でした。

空襲はひどかった。50～60機が飛行場を狙いにきた。野積み燃料入りドラム缶が爆発して、すっ飛ばすのを目の前で見ました。畑仕事、戦車壕（ごう）を掘っている時も来るので、防空壕に急いで入り込みました。

陸戦隊に編成替えされてから銃と弾薬を渡されました。1人200発はなかったですね。こっちは三八式銃で、向こうは自動小銃や火炎放射器。今考えれば、太刀打ちできるわけがない。

マラリアに8回かかりました。2～3日休み、我慢して作業や訓練に戻りました。最初は予防薬もありましたが、最後の方はなかった。現地でも偶然会った幼なじみもマラリアで亡くなったと聞きました。

奄美群島 8月15日、終戦しなかった 戦後に米軍統治

毎日新聞 2017年8月15日 20時43分(最終更新 8月15日 20時43分)

太平洋戦争末期、奄美群島(鹿児島県)の喜界島では島民が米軍の上陸に備え、集団自決も覚悟して山中で息をひそめていた。終戦で地上戦は免れたが、戦後は米軍の統治下に置かれた。島出身で親睦団体「関西奄美会」の役員を務める牧野昭夫さん(78)＝大阪市北区＝は「戦後も日本国民として扱われず、8月15日で戦争は終わらなかった」と振り返る。今春発行した会の創立100周年誌には苦難の日々がつづられている。

喜界町誌によると、島には戦時中、特攻機の飛行場があった。1945年3月に沖縄戦が始まると100回以…

終戦の日 私たちにも関係ある 福島の高1・佐藤真樹さん

毎日新聞 2017年8月15日 12時49分(最終更新 8月15日 12時56分)



全国戦没者追悼式に参列するため、会場に到着した青少年献花者の佐藤真樹さん＝東京都千代田区の日本武道館2017年8月15日午前10時13分、手塚耕一郎撮影

終戦から72年となる15日、政府主催の全国戦没者追悼式が東京都千代田区の日本武道館で開かれ、天皇、皇后両陛下や遺族ら約6700人が参列した。

曾祖父・硫黄島で死亡

式典では戦争の記憶を若い世代に引き継ぐため、11～15歳の遺族6人が青少年代表として献花した。その一人の福島県立会津高1年、佐藤真樹さん(15)は「戦争が日本や世界で起こらないよう、若い私が参加することで同じ世代にも伝えたい」との思いを込めた。

曾祖父の金上豊さんが31歳で硫黄島で戦死したことは、この夏初めて知った。教えてくれたのは、祖母の恵子さん(78)。小さいころから、習い事の送り迎えに戦時中の苦しかった生活は聞かされていたが、「どうして戦争の話ばかりするの？」と煙たがった時期もあった。

小学6年の時には沖縄のひめゆりの塔を見学し「同年代の女の子が駆り出されたんだ」と衝撃を受けた。でも、同級生と戦争の話はほとんどしない。どこか遠い存在だ。

今の日本で戦争が起きることは想像できないが、世界各地で紛争が絶えないのも知っている。「私たちの年代は戦争についての意識が低い。日本で起こったことでさえ忘れら

れていくのか」と怖くもなる。

ひいおじいちゃんのことを考えると「私たちにも関係することなんだ」と実感する。結婚して子どもを産んだら、祖母から聞いた話を教えようと思っている。【山田泰蔵、藤沢美由紀】

ひ孫世代の15歳、佐藤真樹さん「将来、子供にも伝えたい」

日経新聞 2017/8/15 11:33

全国戦没者追悼式では、ひ孫世代を代表して11～15歳の6人が献花する。福島県会津若松市の高校1年生、佐藤真樹(まき)さん(15)は祖母の恵子さん(78)と一緒に初めて参列。献花に際し、「日本のために戦ってくれた方々に感謝の気持ちを伝えたい」と哀悼の意を込める。

真樹さんの曾祖父、金上豊さん(享年31)は1944年に召集され、陸軍に入隊。出征の日、恵子さんは父の後ろ姿が残りとしていたことを今も覚えている。

「恵子、お父さんはお国のために戦死しました」。豊さんは45年3月17日、硫黄島で戦死した。小学校の入学式を間近に控えていた恵子さんは、母のエプロンに顔をうずめて泣いた。

真樹さんは恵子さんから、戦時下の生活を幼いころから聞かされ続けた。真樹さんがご飯を残そうとすると、恵子さんは「戦時中は米粒1つが大事だったんだよ」と諭した。今回、2人で追悼式への参列が決まり、恵子さんは初めて豊さんのことを真樹さんに話した。

「結婚し、出産したら、8月に戦争のことを子供に話してあげたい」。真樹さんは祖母から受け継いだ戦時下の記憶を次の世代に伝えようと決意している。

101歳の芹ヶ野さん「夫、帰ってほしかった」 戦没者追悼式

日経新聞 2017/8/15 11:28

全国戦没者追悼式の参列遺族は戦没者の妻からひ孫まで4世代。参列遺族は「もう絶対に戦争をしてはいけない」と不戦への思いを強く抱く。戦後生まれの参列者が初めて4人に1人を上回り、高校生は戦禍の記憶を風化させまいと誓う。

参列者の最高齢は東京都練馬区に住む芹ヶ野春海さん(101)。「いい人だった。生きて帰ってきてほしかった」と、亡き夫、博さん(享年31)をしのぶ。

博さんとの出会い、結婚、そして妊娠・出産――。「もう忘れちゃった。自分が嫌になる」と春海さんはつぶやくが、愛した人は今も胸の中にいる。毎朝、目を覚ますとまず仏壇に手を合わせるのが日課だ。

博さんは1944年7月に召集され、沖縄へと向かった。陸軍兵として電波警戒隊に所属し、レーダーで敵艦の動向を注視するなどしていた。沖縄戦終結の翌日となる45年

6月24日、巡回中に胸などを撃たれ、最後は手りゅう弾で自決した。

終戦後、部隊長だった男性から手紙を春海さんは受け取った。博さんについて、「一番親しく、頼りにし、よく働いてくれた」とつぶられていた。そして、「6人で穴を掘って埋めました。土をかけ草花をささげました」などと書かれていた。博さんの遺骨は春海さんの元に戻らず、現在も沖縄県本部町に眠っているとみられる。

春海さんは戦後、1人で長男の憲一さん(74)を育てた。行商人として、約30キロの米が入った袋を担ぎ、茨城県つくば市から東京都まで足を運んだ。「お父さんがいないんだから、しっかりしなさい」。苦勞して育ててくれた母の思いに応えようと、憲一さんは大学を卒業し、商業高校の教師になった。

憲一さんが春海さんと一緒に、追悼式に参列するのは今年で3年連続3回目。春海さんに寄り添う憲一さんは「戦争が起きないように祈りたい」と話した。

終戦の日 「戦争は怖いイメージ」追悼式参列の6歳

毎日新聞 2017年8月15日 19時41分(最終更新 8月15日 21時39分)



曾祖父・章さんの遺影を持ち、全国戦没者追悼式に向かう田辺彩乃さん＝東京都千代田区の日本武道館で2017年8月15日午前10時39分、渡部直樹撮影

全国戦没者追悼式に宮崎市に住む小学1年の田辺彩乃さん(6)が参列した。曾祖父の章さんは1945年に沖縄本島の沖合で命を落としたという。戦争のことは「何となくしか分からない」としながらも「怖いイメージ。やってはいけないこと」と語る。

会社役員の子、揮一朗さん(46)らによると、章さんは陸軍技手として飛行…

全国戦没者追悼式 最年少の参列者は
NHK8月15日 12時15分



全国戦没者追悼式の参列者で最年少となる6歳の宮崎市に住む田辺彩乃さんは沖縄戦で曾祖父の田邊章さんを亡くしました。

彩乃さんは両親とともに曾祖父の遺影を胸に抱いて式典に参列し「ひいおじいちゃんに会いたかったです」と話していました。

また、彩乃さんの父親で、章さんの孫の揮一朗さん(46)は「遺族が高齢化するなか、戦争のことを語り継いでいかないといけないという思いから、娘と一緒に参列することにしました。戦争では多くの命が失われましたが、命がいちばん大切なので、娘たちにはしっかりと命をつないでいてもらいたいと思います」と話していました。

終戦の日 ピースおおさかで追悼式 モニュメントに献花

毎日新聞 2017年8月15日 18時59分(最終更新 8月15日 18時59分)

大阪市中央区のピースおおさか(大阪国際平和センター)では15日、戦争犠牲者の追悼式があり、参加者231人が黙とうした。大阪空襲で亡くなった人たちの名前が刻まれたモニュメントに献花し、平和を祈った。

大阪は1944年12月から終戦までに、米軍による50回以上の爆撃を受け、死者・行方不明者は約1万5000人に上った。モニュメントの銅板には判明している9079人の名前が刻まれている。

国民学校6年生だった45年3月13～14日の大阪大空襲で、母親(当時38歳)と祖父を亡くした近藤豊子さん(84)＝大阪府豊中市＝は「もう一度、話がしたい」と涙を浮かべた。家族で大阪市西区の自宅から避難する途中、体調を崩していた祖父と付き添った母親が行方不明となった。近藤さんは2人の名が刻まれた銅板に花を手向け、「モニュメントがお墓代わり。戦争で得るものは何もない」と訴えた。【宮本翔平】

終戦の日 「日中友情の炎は消さぬ」和歌山・海南でつどい

毎日新聞 2017年8月15日 13時26分(最終更新 8月15日 13時26分)

和歌山県海南市日方の燦燦(さんさん)公園では、15日午前7時から「第47回日中不再戦のつどい」があった。同市は地場産業の漆器生産のため、漆を中国から輸入していた関係などで、日中国交回復前の1971年に当時の市長や市民、企業・団体による取り組みで「日中両国平和の塔」が建立され、毎年終戦の日に塔の前でつどいが催されている。

日中友好協会和歌山県連合会の幡川文彦副会長(80)は「塔に刻まれた『時の流れはいかにあろうと両国人民の友情の炎は消しうるものではなかった』の精神で不戦、平

和のための努力を続けたい」などとあいさつ。参加者が塔に献水し、それぞれの戦争体験を語り合った。【矢倉健次】

戦争体験を聞く集い

NHK8月15日 19時32分



終戦から72年を迎えた15日、長野市では戦争を体験した人たちの話を聞く集いが開かれました。

この催しは長野市の市民団体が戦争の悲惨さと平和の尊さを伝えていこうと毎年行っていて、15日はおよそ50人が参加しました。

催しではまず72年前の終戦の日、昭和天皇がラジオを通じて国民に終戦を告げた玉音放送を聞きました。このあと戦争を体験した人たちがそれぞれの体験を語りました。

このうち終戦当時教師だった小池さちみさん（93歳）は「玉音放送を聞いて教師の中にはうなだれる人もいましたが校庭で遊んでいる子どもたちの様子を見て、今後日本がどうなるのかとぼう然となりました」と終戦を迎えた時の心境を語りました。

また、満蒙開拓団として旧満州に渡ったあと、シベリア抑留を経験した坂田雪男さん（93歳）は「トラックに積み込まれシベリアの収容所に来た大量の日本兵の死体を凍った地面を掘って埋めました。その遺骨をどうにか遺族に渡したいです」など語り、参加者たちは壮絶な体験をした人たちの話に聞き入っていました。

参加した10歳の男の子は「もともと戦争はしちやいけなと思ってたけど、お話を聞いて本当にしてはいけないと思った」と話していました。

また65歳の男性は「戦争が大変だったと思うことにとどまらないで若い人にいかに伝えていくか。家族とか子どもたちに感じたことをそのまま話したい」と涙ぐみながら話していました。

子どもたちが平和を考える催し 栃木 足利

NHK8月15日 18時17分



栃木県足利市では子どもたちが工作や体験者の話をおし

て戦争や平和を考える催しが開かれました。

この催しは栃木県足利市の市民団体が市立図書館で開いたもので、親子連れなど20人ほどが参加しました。会場では工作教室が開かれ、子どもたちが、市内で行われる平和を願うイベントで川に流す灯笼を作ったり、はとの絵を描いたうちわを作ったりしました。

また子どもたちは、終戦当時18歳で現在も現役の保育士の大川繁子さん（89）から体験を聞きました。

大川さんは戦時中、東京の工場で戦闘機の部品を作っていて、「ただただ毎日、日本が勝っているという話しか聞かされず、戦争をやめようと自分の意見を言うことすら許されなかった」と振り返りました。そのうえで「戦争は始めたらやめられないもので、戦争をしては絶対にいけない」と訴えていました。

11歳の女の子は「みんな笑顔で過ごせるように戦争を繰り返してはいけないと感じました」と話していました。

この催しを主催した市民団体の高沢友佳里さんは「今ある平和というのは、当たり前にあるものではないということ子どもたちに伝えられてよかったです」と話していました。

空襲で1500人余が犠牲 平和を祈り行進 茨城 日立

NHK8月15日 18時03分



空襲などで1500人余りが犠牲となった茨城県日立市で、市民たちが平和への祈りをこめて市内を行進をしました。戦争の悲惨さや命の大切さについて考えようと毎年、終戦の日に行われている行進には、ことしもおよそ150人の市民が参加しました。

はじめに日立市役所で集会が行われ、小川春樹市長が「あの悲惨な戦争を二度と起こさない。そして平和な社会を築いていくために今を生きる私たちが努力し、後世に伝えていかなければならない」と訴えました。

このあと参加者たちは市役所を出発し、JR日立駅までのおよそ1キロの道のりを「戦争の悲惨さを後世に伝えよう」とか「平和な世界をつくろう」と書かれたプラカードを持って行進しました。平和への願いを込めて駅前に設置された鐘の前に到着すると、正午に鳴らされる鐘の音にあわせて1分間の黙とうをささげました。

3歳の息子と一緒に参加した市内の30代の男性は「平和の重みを感じました。子どもにも平和の大事さを理解してもらえるように今後も一緒に行進に参加していきたいです」

と話していました。

「平和の鐘」鳴らし戦争や核兵器ない世界を願う 広島

NHK8月15日 14時29分



「終戦の日」の15日、広島市の平和公園では被爆者や高校生たちが、戦争や核兵器のない世界を願って「平和の鐘」を鳴らす集いが開かれました。

広島市の平和公園にある「平和の鐘」には世界が1つになってほしいという願いを込めて、国境のない世界地図が刻まれています。

15日は広島ユネスコ協会の呼びかけで、年に1度この鐘を鳴らす集いが開かれ、被爆者や高校生などおよそ120人が参加しました。

はじめに、広島大学附属高校2年でほかの学校の生徒に平和公園を案内する部活動をしている齊藤優奈さんが平和のメッセージを読みあげました。

この中で齊藤さんはことし、国連で核兵器禁止条約が採択されたことについて触れ、「条約の採択は核兵器廃絶への小さな一歩です。私たちは被爆者から直接聞いた核兵器の恐ろしさを世界に発信しなければなりません」と呼びかけました。

このあと参加した人たちは、戦争や原爆で亡くなった人たちに黙とうをささげた後、戦争や核兵器のない世界を願って順番に「平和の鐘」を鳴らしました。

広島で被爆した末重文男さん(87)は「被爆の惨状は言葉では言い表せないもので一生忘れません。鐘の音に合わせてみんなが平和を願ってくれたらいいです」と話していました。

長崎 爆心地公園で被爆者団体など「不戦の集い」

NHK8月15日 13時10分



終戦の日の15日、長崎市の爆心地公園で、被爆者団体などが、戦争の犠牲者を追悼し平和を願う「不戦の集い」を開きました。



不戦の集いは、長崎市の被爆者団体や平和団体が毎年、終戦の日の8月15日と太平洋戦争が始まった12月8日に開いています。

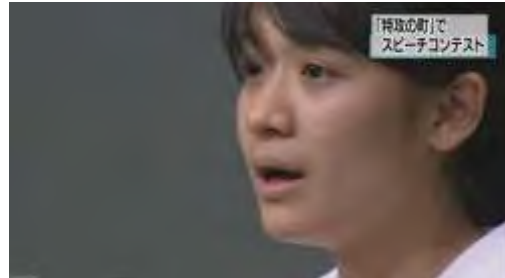
15日は、爆心地公園にある核兵器の廃絶や戦争反対への誓いを込めた「不戦の碑」の前に被爆者や高校生らおよそ20人が集まり、全員で黙とうをしたあと、1人ずつ花を手向けて戦争で犠牲になった人たちを追悼しました。続いて、参加者が「絶対に戦争を起こしてはならない」などと平和への思いを訴えました。

そして、平和学習に取り組んでいる長崎市の活水高校3年生、渡辺雪乃さん(17)が「不戦の誓い」として「平和は、何も起こさずに実現できるものではありません。私たちのような若者が国を超えて未来を作っていくことを誓います」と話しました。

この集いに参加した被爆者で作る「長崎の証言の会」の森口貢さん(81)は「戦争が二度と起こらないよう、若い人たちには平和の尊さを感じてほしいです」と話していました。

特攻基地の町 鹿児島 知覧で平和スピーチコンテスト

NHK8月15日 13時04分



終戦の日の15日、多くの若者が特攻隊員として飛び立った鹿児島県南九州市の知覧町で、平和への思いや命の尊さを訴えるスピーチコンテストが行われました。

コンテストが開かれた南九州市知覧町は、太平洋戦争末期に陸軍の最も規模の大きい特攻基地が作られ、この基地から飛び立った439人の若者が亡くなりました。

15日は、中学生や高校生など12人がスピーチを行い、このうち地元の南九州市立知覧中学校3年、中釜望希さんは特攻隊員を供養する石灯籠を学校活動で磨いた経験を基にスピーチし、「知覧の街に並んだ石灯籠と同じくらの若い命が未来の平和を願って飛び立ったことを忘れてはなりません」と力強く訴えました。

また、鹿児島市の鹿児島玉龍高校1年の兼井舞音さんは、

戦地に行った経験のある曾祖父の言葉や特攻隊員の遺書を読んだ経験から思いをつづり、「誰にも『命を捨てろ』と言われることのない今は幸せで、感謝しなければいけないと思います。平和しか知らない世代が先人の思いを忘れることがあってはなりません」と平和な日常の大切さを語りました。

会場にはおよそ500人が集まり、真剣な表情でスピーチに聴き入っていました。

知覧町の65歳の男性は「自分自身も戦争を知らない戦後生まれの世代なので、これからも勉強し続けなければならない。私も若い人たちに戦争の悲惨さを伝えていきたい」と話していました。

元特攻隊員 形見「いらん」 父の怒り、親になり知る

毎日新聞 2017年8月15日 11時29分(最終更新 8月15日 11時57分)



戦時中の自身の写真を前に語る西村辰三さん＝京都市左京区で2017年8月9日、平川義之撮影

「形見に」と渡そうとした爪と髪の毛を、父は受け取らなかった。元海軍特攻隊員の西村辰三(たつぞう)さん(89)＝京都市左京区＝が父の怒りを理解できたのは戦後、家庭を築いてからだった。「子供が親に形見を渡すなんて残酷なこと。僕は一番、親不孝なことをしてしまったんや」。生きて帰った元軍国少年は今、子や孫、ひ孫に囲まれ、平和な時代が続くことを願い、この夏出版された戦争証言集に自らの体験をつづった。【田辺佑介】

西村さんは旧制立命館中学4年の時、学校で講演した海軍士官の呼びかけに応じ、「天皇陛下のために命をささげるんだ」と1943年10月に海軍飛行予科練習生(予科練)に入隊した。父辰之助(たつのすけ)さんは「子供の行くところじゃない」と反対したが、押し切った。

10カ月の訓練後、博多海軍航空隊(福岡市)に配属。特攻隊が編成されると、上官から「志願する者はいるか」と問われ、隊の仲間約90人全員が手を挙げた。夜間急降下や低空飛行訓練を繰り返し、仲間8人が事故死した。面会に来た父に「僕が突っ込んだら何も残らんさかい、これ持って帰ってくれ」と封筒を渡した。中には自分の爪と髪の毛が入っていた。父は「いらん」と怒って突き返した。

45年7月に鹿児島市の海軍鹿児島航空基地に移り、8月15日を迎えた。通信兵から玉音放送を書き起こした紙を見せられたが正式な命令はなく、「俺らがいるのに戦争が終わったなんてバカなことがあるか」と一蹴した。

数日後、「天草沖に敵部隊」と情報が入り、上官から「身の回りの整理をしておくように」と伝えられた。ようやく出撃の機会を得たと思ったが、頭をよぎったのは両親や兄、妹の顔だった。敵艦は見つからず、上官が改めて終戦を告げた。悔しさもうれしさもなく「俺らが出て行ったら勝ったんちゃうんか」とも思った。実家に戻ると家族は「よう帰ってきたな」と喜んでくれた。

父と同じ大工になり、結婚して子供を2人もうけた。「出撃していたら、こんな日は来なかった」。父が封筒を突き返した理由が分かった。仕事は70代まで続け、今は4人の孫と5人のひ孫の成長を見守るのが楽しみだ。今年、第30集を迎えた証言集「孫たちへの証言」(新風書房)に自身の思いなどを寄せた。テロが頻発する世界情勢、戦争を知らない世代の政治家による危うい発言に、戦前の空気に近づいている気がする。

「僕らは何の疑問も持たず軍隊に入り、命をささげるのは当たり前という教育を受けてきたが、間違っていた。武力に対し武力を用いても、絶望と悲しみが残るだけ。軍隊も核も持たない日本を誇りに思う」

終戦の日 父の自決、70年過ぎ知る 101歳母と追悼式

毎日新聞 2017年8月15日 12時27分(最終更新 8月15日 15時36分)



全国戦没者追悼式に車椅子で向かう芹ヶ野春海さん(手前)と長男の憲一さん＝東京都千代田区の日本武道館で2017年8月15日午前10時11分、渡部直樹撮影

戦死した夫をしのぶ人。残された母の苦労を思う人――。終戦から72年となる15日、今年も妻からひ孫まで全国の戦没者の遺族が東京都千代田区の日本武道館に集い、全国戦没者追悼式に参列した。二度と悲惨な戦争を繰り返さないよう、すべての人が平和への誓いを新たにした。

薄れる記憶「語り継ぐ」

参列した遺族の最年長、芹ヶ野春海(せりがの・はるみ)

さん（101）＝東京都練馬区＝は小雨の中、長男の憲一さん（74）に車椅子を押してもらいながら武道館に入った。「戦争なんて嫌だもんね」と、春海さん。憲一さんは道すがら「お父さんのお参りに行くんだよ」と話しかけていたという。

沖縄で夫の博さんが31歳で没して72年。春海さんの当時の記憶はおぼろげになり、幼かった憲一さんにも父の思い出はない。それでも「母は『元気なうちは行きたい』と話していた」（憲一さん）と、3年続けて式典に参加した。

博さんは、沖縄の組織的戦闘が終結したとされる翌日の1945年6月24日、沖縄県本部（もとぶ）町で亡くなった。その死が自決だったと憲一さんが知ったのは昨年のことだ。

親戚宅で古い荷物の整理をしていたら、表書きに「肉筆書」とある封書が出てきた。＜沖縄より復員して参りましてようやく……＞。父が所属していた部隊長が春海さんに宛てた手紙だった。父のことを「博様」と呼んでいた。

手紙によると、父は部隊の見回りの際に銃撃を受け、胸や腹に被弾。手投げ弾で反撃した後、手元に残る一発を抱いて自死したという。＜（博様は）私の一番親しく一番頼みとし、一番良く働いてもらった。亡きがらを眺めて歯ざりしりし、6人で抱き合っ泣きました＞。初めて知る父の最期に、憲一さんは涙で読み進めることができなかったという。

体も記憶力も弱まった春海さんが語る夫の思い出は断片的だ。看護師をしていたころに博さんと知り合い、鹿児島などで暮らした。子どもができて間もなく出征。結婚生活は短かったが「面倒見のいい優しい人だった」と振り返る。

戦後は郷里の茨城県筑波町（現つくば市）に戻り、毎日大きな紙の米袋を背負って、汽車で東京の上野や日暮里へ行商に出た。憲一さんは「お父さんがいないんだから、しっかりしなさいよ」と母に時折言われたのを覚えている。

戦争が終わってしばらく、春海さんは帰還兵が乗る列車を見るたびに「生きて帰って来てくれればなあ」と思っていたという。今も毎朝洗顔を済ませると、仏壇に向かいお経を読むのが習慣だ。

春海さんは3年ほど前、子宮のがんが見つかった。「戦没者の妻はもう少ない。私たち世代が戦争を語り継がなければ」。母の小さい背中を見ながら、憲一さんは72年の歳月を思う。【山田泰蔵】

全国戦没者追悼式 最年長遺族は

NHK8月15日 12時17分



最年長の参列者で東京・練馬区に住む101歳の芹ヶ野春海さんは昭和20年6月に沖縄本島で結婚してまもない夫の博さん（当時31）を亡くしました。15日の式典には長男の憲一さん（74）に車いすを押してもらいながら参列しました。

芹ヶ野さんは「夫は1度も怒ったことがない、優しい人でした。当時のことはあまり思い出せないが、戦争は嫌なものです」と話していました。

また長男の憲一さんは「父が亡くなったのは2歳の頃でした。父が残した絵はがきの字を見ると、几帳面な人だったのだろうと思う。戦争がなければ母も苦しい思いをせず、家族で過ごせただけに、戦争は本当に反対です」と話していました。

軍人恩給 戦没軍人の妻、2万人割る 平均94歳

毎日新聞 2017年8月15日 08時00分(最終更新 8月15日 08時00分)



公務扶助料の受給者数

記憶の継承が年々難しく

第二次世界大戦で夫が戦死し、軍人恩給（公務扶助料）を受け取る戦没軍人の妻が今年度、初めて2万人を割る見通しであることが総務省への取材で分かった。平均年齢は94歳を超え、戦争を語れる妻たちの減少が急速に進む。以前は国や都道府県の戦没者追悼式で元軍人・軍属の妻が遺族代表の言葉を述べるのが一般的だったが、今年、妻が代表となるのは愛知、香川、奈良の3県のみで、記憶の継承が年々難しくなっている。

総務省によると、戦没軍人の遺族に支払われ、現在は大半が妻が対象となる公務扶助料の受給者は1957年度の153万7075人をピークに減少。2008年度に10万人を割り、16年度は2万4726人だった。総務省はこれまでの減少ペースから今年度の受給者を最大2万人と見込み、支給額として約389億円を予算計上。過去に支給実績が当初見込みを上回ったことはなく、受給者が2万人を割るのは確実とみられる。軍の後方支援などをする軍属や準軍属だった夫の遺族年金を受け取る妻も減少が進み、今年6月末で4025人。10年間で1万2460人減っ

た。

戦争を知る世代の減少は記憶の継承をますます難しくしている。毎年8月15日の全国戦没者追悼式で追悼の言葉を述べる遺族代表は平成に入るまで主に妻が務めたが、14年を最後に15、16年は遺児で、今年も福岡県の遺児が務める。追悼式を取り仕切る厚生労働省の担当者は「近年は追悼から継承の場へと性格が変わってきている」と話す。都道府県主催の追悼式でも5年前の5県から更に減った。

16年から2年連続で遺児が代表となった福岡県の担当者は「より濃厚な戦争体験を持つ方に語っていただきたい思いはあるが、今年参列できる妻は4人。どなたも90代と高齢で、追悼の言葉をお願いするのは難しい」と言う。

【取違剛、比嘉洋、井上卓也】

次世代へ語って

明治大平和教育登戸研究所資料館長の山田朗（あきら）教授（日本近現代政治史・軍事史）の話 人から人へ口承できる時代が終わりつつあり、戦争の記憶の希薄化は避けられないが、親の話を聞いた子の代が孫、ひ孫に語り続けることが大事だ。人が人に語りかける行為を通じて、記憶は継承されるエネルギーを持つ。

軍人恩給（公務扶助料）

戦没軍人の遺族を対象にした恩給。妻がいなければ未成年の子、重い障害があって生活の糧を得られない成年の子の順で引き継がれる。現在は妻が障害がある子に限られ、総務省によると9割以上が妻とみられる。支給額は軍歴と戦死当時の俸給に応じて決められ、大半が最低補償額の年196万6800円。軍人ではない軍属・準軍属の戦没遺族には厚生労働省が所管する遺族年金が支払われている。

防空壕 狭さ、暗さに衝撃 3年ぶり一般公開 山形

毎日新聞 2017年8月15日 10時30分(最終更新 8月15日 12時55分)



公開された防空壕内で、説明を受ける参加者たち。右手のはしごは入り口近くの銃座につながっている＝山形県東根市の若木山防空壕で2017年8月14日、野間口陽撮影
戦後72年の夏を迎え、旧軍が山形県東根市神町地区の

若木（おさなぎ）山に建設した県内最大規模の防空壕（ごう）が14日、3年ぶりに一般公開された。海軍航空隊が置かれた神町は終戦間際の1945年8月9日以降、米軍機の空襲を受けている。防空壕には兵士や付近の住民100人以上も避難し、内部はすし詰め状態になったという。訪れた参加者は「狭さと暗さに衝撃を受けた」と驚いていた。【野間口陽】

主催した若木山防空壕保存会（高橋浅十会長）によると、一般市民用ではなく、弾薬、燃料などの保管用だっ…

**特集ワイド 会いたい・2017年夏／6 山崎豊子さん
魂込め戦争と向き合い**

毎日新聞 2017年8月15日 東京夕刊



山崎豊子さん＝東京都港区で1990年1月、荒井真治撮影

山崎豊子さん 作家（2013年死去、享年89）

電話口の声は乱れていた。「大変です！ テレビをつけてください！」。堺市の山崎豊子さんの自宅。2、3時間前まで打ち合わせに訪れていた編集者からだった。秘書の野上孝子さん（77）が慌ててスイッチを入れると、巨大津波が押し寄せる東北沿岸部が映し出されていた。山崎さんは言葉を失い、画面を食い入るように見つめていた。

2011年3月11日、未曾有の被害をもたらした東日本大震災。とりわけ山崎さんが衝撃を受けたのが、東…

Topics 林京子の人と文学を語る会 「冷静かつ綿密な文体」 加賀乙彦さんら発起人 作家、編集者60人参加

毎日新聞 2017年8月15日 東京夕刊

長崎への原子爆弾投下から72年となった9日、「林京子の人と文学を語る会」が東京都内で開かれた。核と人類が共存できないことを一貫して表現し、今年2月に86歳で死去した作家の林をしのぼうと、編集者ら約60人が参加。作家の加賀乙彦さん、三木卓さん、森詠さん、文芸評論家の川村湊さんが発起人となった。

林は敗戦から30年たった1975年、学徒動員されて

いた長崎市の兵器工場で被爆した体験をつづった『祭りの場』で芥川賞を受賞した。加賀さんは一連の原爆文学について「端正で美しい文体で、感情を高ぶらせることなく冷静かつ綿密に恐怖を描き出している。非常に厚みがある」と評価した。



林京子の遺影と著書＝東京都文京区で2017年8月9日午後6時52分、鶴谷真撮影

さらに同作の<幼女はオカッパ頭が半分そぎとられて、頬にはりついてた。ほっかり唇を開いて眼をあけて…

激戦の島に3人の遺骨 日本兵か 千島列島北部

NHK8月16日 4時31分

太平洋戦争で日本が降伏した直後に日本軍とソビエト軍の間で激しい戦闘が行われた千島列島北部のシュムシュ島（占守）で、日本兵と見られる3人の遺骨が見つかりました。このうち1人の遺骨のそばでは個人の認識票と見られる遺品も見つかり、身元の特定につながるものが期待されています。

シュムシュ島では太平洋戦争で日本が降伏した直後の1945年8月18日に侵攻したソビエト軍と日本軍の守備隊との間で激しい戦闘が行われ、ロシア側によりますと、双方合わせて700人以上が死亡したとされています。

ロシア極東のサハリン州政府などは15日、6月から先月にかけて行った現地調査の結果を発表し、日本兵と見られる3人の遺骨とソビエト兵と見られる47人の遺骨を発見したことを明らかにしました。このうち日本兵と見られる1人の遺骨のそばでは兵士の名前や所属する部隊を記した認識票と見られる遺品も見つかったということで、身元の特定につながるものが期待されています。

シュムシュ島では去年までに日本兵と見られる50人余りの遺骨が見つかったものの、身元が特定されて遺族に返還されたのは1人にとどまっています。ロシア側は3人の遺骨を去年見つかった12人の遺骨とともに日本側に引き渡すことにしています。

「この世界の片隅に」監督 終戦の日に戦争への思い語る
NHK8月15日 20時24分



広島や呉を舞台に戦時中の日常を丁寧に描いたアニメーション映画「この世界の片隅に」が今月に入って各地の映画館で再上映され、終戦の日の15日は片渕須直監督が埼玉県内の映画館を訪れて戦争に対する思いを語りました。この史代さんの漫画を原作にした映画「この世界の片隅に」は戦時中の広島や呉を舞台に厳しい生活の中でも明るさを忘れない主人公の女性と家族の日常を描いた物語で、写真などの膨大な資料に基づいて当時の町並みや人々の生活が丁寧に描かれています。

映画は去年11月に上映が始まりましたが、配給元の東京テアトルによりますと、戦争について知るきっかけにしようと、すでに上映を終えた映画館でも再上映の動きが見られ、今月は全国のおよそ50の映画館で上映が行われたり決まったりしているということです。

今月12日から再上映を始めた埼玉県川越市の映画館では終戦の日に合わせて片渕須直監督が上映後に舞台あいさつをしました。

片渕監督は「広島では特に8月に入ってから大きな空襲が続き、亡くなった人がたくさんいた。そのように追い詰められ、締めつけられるような日々が8月15日で終わった」と話したうえで「15日という日はただの終戦の日ではなく、そういう日々の末に訪れた日です。人々の苦しみはその先も解消されず、乗り越えなければならぬものがたくさんありました。戦争というものは、終戦の日だけで語れるものではありません」と力強く語っていました。

片渕監督「当時の人たちのこと感じて」

片渕監督は「私も戦後生まれだが、これからの世代の人に映画を通して当時の人たちのことを少しでも感じてもらえればと思っています。劇場での上映がここまで続いているということは多くのファンの皆さんに支えられているからだと思います。これからも多くの人に見てもらえれば」と話していました。

娘と一緒に映画館を訪れた45歳の女性は「見る前は重い映画だと思っていましたが、どこか笑えるところもあるいい映画でした。国際情勢が緊迫している今、この映画を見て、私たちにとってもひと事ではないんだということを心の片隅に置いておかなければならないと感じました」と話していました。

特攻兵器「回天」基地の島で平和の鐘鳴らす

NHK8月15日 19時18分



太平洋戦争の末期に特攻兵器「回天」の訓練基地があった山口県周南市の大津島で、終戦の日の15日、平和を願い鐘を鳴らす式典が開かれました。

魚雷に人が乗り込んで操縦し、敵の軍艦に体当たりした特攻兵器「回天」の訓練基地があった大津島では、毎年、終戦の日に合わせて戦争のない世界を願う式典が開かれています。

15日は、島の回天記念館に地元の人などおよそ70人が集まりました。

式典では、中学生6人が「すべての生命を大切にし、どんな暴力も許しません。思いやりの心を持ち、助け合います」などと、ノーベル平和賞の受賞者たちによる「平和宣言」を読み上げました。

そして、全員で戦争の犠牲者に黙とうをささげたあと、参加者が戦争中に沈没した戦艦の大砲の薬きょうから作られた鐘を順番に打ち鳴らし、平和への誓いを新たにしました。中学3年生の男子生徒は「私と同じ世代の人たちが回天に乗り込み命を落とした過去があることを忘れず、二度とこうした悲劇が起きないように、戦争のない世界を目指したい」と話していました。

空襲から逃れようと犠牲に 東京の川で追悼の灯籠流し

NHK8月15日 19時16分

終戦の日の15日、東京大空襲で大きな被害を受けた東京の下町を流れる川では、犠牲者を追悼する灯籠流しが行われ、平和を願う人たちの祈りが続きました。

およそ10万人が犠牲になった昭和20年の東京大空襲では、東京の江戸川区と江東区の間を流れる旧中川に火の手から逃れようと多くの人々が飛び込み、およそ3000人が亡くなったとされています。



終戦から72年となった15日、川にかかる橋の上には地元の人などが集まり、鐘の音に合わせて黙とうしたあと、

白い菊の花が川に投げ入れられました。

そして、日没をすぎた午後7時ごろ川岸に移動し、「悲劇をくり返さない」とか「戦争のない平和な世界を」などと書かれた2400個の灯籠を川面に浮かべていました。集まった人たちは、ゆっくりと流れる灯籠の明かりを見送りながら静かに手を合わせて犠牲者を追悼し、平和への思いを新たにしていました。

3歳の時に空襲で祖父と妹を亡くしたという江戸川区の片柳泰一さん(76)は「空襲のなか母親におんぶされ火の粉を払いながらなんとか逃げたが、真っ赤な空や炎の熱さは今でもはっきりと覚えている。悲劇の歴史を忘れてはならない」と話していました。

終戦の日 沖縄戦などの戦没者名簿を虫干し

NHK8月15日 18時49分



「終戦の日」の15日、那覇市でふだん慰霊碑に収められている沖縄戦などの戦没者名簿の虫干しが行われました。那覇市の公園に建つ「なぐやけの碑」には、昭和19年に県内各地が激しい攻撃を受けた空襲や沖縄戦などで犠牲になった那覇市出身の戦没者、およそ2万9000人の名簿が収められています。

「終戦の日」の15日、遺族など30人近くが慰霊碑に集まり、沖縄戦で父親を亡くした那覇市連合遺族会の瑞慶山良祐会長が、扉の鍵を開け名簿を取り出しました。遺族たちは1枚1枚ゆっくりと名簿をめくりながら、戦没者の名前を指でなぞったり、「こどもも会いに来ましたよ」などと言いながら、名簿に風を通していました。

沖縄戦で父親や祖母、きょうだい3人を亡くした照屋苗子さん(81)は「名簿を通して、戦争を二度と繰り返してはいけないということを子や孫に伝えたい」と涙ぐみながら話していました。

また、召集され戦闘に参加した座喜味和則さん(90)は「もう高齢なので若い人たちに自覚を持ってもらい、核兵器のない平和な世の中を作っていってほしい」と話していました。

(聞きたかったこと 広島)「先頭に立ってほしかった」

朝日新聞デジタル佐々木康之 2017年8月16日 09時32分



核廃絶

への思いを語る植田雅軌さん＝呉市苗代町

核兵器禁止条約が採択された国連本部での交渉会議に、唯一の戦争被爆国である日本は参加しなかった。「先頭に立ってほしかった」。呉原爆被爆者友の会の植田雅軌（まさのり）さん（85）は悔しく思う。わが身を苦しめ、心を萎縮させた核兵器をなくすには――。植田さんの思いを聞いた。



1945年の夏。旧制山陽中学校（現山陽高校）の2年生だった植田さんは、広島電鉄の天満町の停留場（広島市西区）近くの製缶工場に動員されていた。午前8時には工場の隣の食堂に集まり工場長らの訓話を聞き、潜水艦に積む魚雷の信管を造る。

8月6日もいつものように、前…

文集は捏造、撮影前に目薬… 「誉れの子」いまの思いは朝日新聞デジタル木村司、岩崎生之助 2017年8月16日 04時08分



八巻春夫さんが表紙を飾った

1941年4月発行の「写真週報」。緊張した表情で皇后陛下からお菓子を受け取り、左ほおに一筋光るものがみえる

日本兵の父親が戦死したことで「誉れの子」と呼ばれた子どもたちがいた。全国各地で選抜され、東京・九段の靖国神社に参拝。「父との対面」は美談に仕立てられ、戦意高揚に利用された。戦後72年。普通に悲しむことを許されなかった遺児たちはいま、何を思うのか。（木村司、岩崎生

之助）



丸刈り頭の少年が、口を一文字に結んでいる。ほおには一筋の「涙」が光る。



写真の少年は、小学5年の八巻春夫君。1938年、父が中国で戦死した。

父が祀（まつ）られた靖国神社参拝のため41年3月、日本兵の遺児代表として上京。皇后陛下から菓子を受け取った。その瞬間をとらえた写真は、内閣の情報局が発行した国策グラフ誌「写真週報」の表紙を飾り、「誉れの子」の象徴的存在になった。

それから70年余り。少年は87歳になり、山梨県南アルプス市で暮らしている。

「お菓子をもらったときはなんとも言われぬ、感無量で、本当に涙が出ました。でも、撮影前、目薬をさされました」

【続きあり】

陸軍墓地で鎮魂の「万灯会」 墓碑5100基にろうそく 朝日新聞デジタル左古将規 左古将規 2017年8月16日 00時54分



墓碑に手を

合わせる親子ら＝15日午後7時18分、大阪市天王寺区、内田光撮影

終戦の日の15日、国内最古の陸軍墓地「旧真田山（さなだやま）陸軍墓地」（大阪市天王寺区）で、戦没者の鎮魂を祈り、墓碑約5100基の前にろうそくの火をともし万灯会（まんとうえ）があった。長女の優芽（ゆめ）ちゃん（4）を連れて訪れた大阪市中央区の松藤（まつふじ）隆則（たかのり）さん（40）と香奈（かな）さん（37）

夫妻は「この子たちが戦争を知らずに過ごせますように」と手を合わせた。

墓地は1871（明治4）年にできた。墓碑の傷みが激しく、市民団体が保存活動をしている。（左古将規 左古将規）



■劣化した墓碑、保存活動も

15日に万灯会（まんとうえ）があった「旧真田山陸軍墓地」では、戦没者名や経歴などが刻まれた表面がはがれ落ち、碑文が読めなくなった墓碑もある。研究者や住民らのNPOが経年劣化の調査と、保存活動をしている。

墓地は1871（明治4）年に、日本初の戦没者埋葬地として開かれた。約1万5千平方メートルの敷地に、明治初期の西南戦争以来の戦死者や病死者の墓碑約5100基が並ぶ。

墓碑の多くが「和泉砂岩（いずみさがん）」という岩石でできており、長年風雨にさらされ、表面がもろくなっている。NPO法人「旧真田山陸軍墓地とその保存を考える会」は昨年11月～今年8月11日、計7回にわたって墓地を調査。墓碑からはがれ落ちた石のかけらを、計178カ所で拾い集めた。

国立歴史民俗博物館が1996…

新型爆弾、市民に伝えず 暗号班の元兵士、消えない葛藤

朝日新聞デジタル佐々木亮 2017年8月15日 21時27分

「一瞬の閃光（せんこう）を浴びて焼き尽くされ、まさに瓦礫（がれき）の山」。1945年8月、原爆が投下された広島について、軍内部にはそんな暗号電報がいち早く伝わっていた。情報を得た陸軍久留米師管区司令部（福岡県久留米市）は、空襲を前に山への疎開を始めた。司令部の暗号班にいた元兵士はそう証言し、「一般の人に伝えて避難に導くべきではなかったか」との葛藤をずっと抱いてきた。

■司令部、原爆情報で疎開

溝田政行さん（91）＝福岡県八女市＝は19歳だった

45年1月、徴兵されて陸軍に入隊した。軍馬を受け持つ輜重（しちょう）兵を経て、約2カ月半後に久留米師管区司令部の暗号班に配属された。



暗号班の体験を語る溝田政行

さん＝福岡県八女市



暗号班の任務は、週1回変わる計算表をもとに数字の暗号で届いた電報を解読したり、報告の電報を暗号にしたりすることだった。

班長の中尉以下約20人の班は秘密保持のため、表向きは「電報班」と呼ばれた。建物は鉄格子と金網で囲われて暗号班以外の立ち入りは禁止。応対は縦横30センチほどの窓を通してした。

すでに敗色が濃厚な時期。沖縄から1日2回、「天気情報」が届いた。日々動く「等圧線」を装って日本軍が後退する様子を連絡してきた、と暗号班の誰もが感じていた。だが、それを口にはできなかった。

8月6日に広島に原爆が投下されると、「新型爆弾で一瞬の閃光を浴びて焼き尽くされ、まさに瓦礫の山である。特に閃光に注意されたし。貴司令部も直ちに疎開されたし」などと記された暗号電報が届いた。

この情報を受けて、司令部は久…

終戦間際に戦死、レイテに眠る兄へ 81歳、追悼式に

朝日新聞デジタル辻村周次郎 2017年8月15日 19時20分



昨年訪れたフィリピン

の写真を見ながら戦死した兄の幸太郎さんへの思いを語る古株五郎さん＝12日午後、滋賀県竜王町、辻村周次郎撮影



日本武道館（東京都千代田区）で15日開かれた全国戦没者追悼式に、滋賀県竜王町の古株（こかぶ）五郎さん（81）の姿もあった。米軍との激戦で日本兵約8万人が死亡したとされるフィリピン・レイテ島で、終戦直前に戦場で命を落とした兄の幸太郎さん（当時22）らを悼み、遺族代表の献花者の一人として花を手向けた。

午前9時半、古株さんは都内の宿舎から会場に到着。心の中で「兄さん、天国から見てくれていますか」と語りかけたという。

13歳年上の兄・幸太郎さんは衛生兵として陸軍に入り、日本の降伏の1カ月前の1945年7月に戦死したという。五郎さんは5人兄弟の末っ子。幼いころに幸太郎さんが旧満洲（中国東北部）に渡ったため、記憶はほとんどない。母親からは「頭の良い優秀な人」とよく聞かされていたが、戦後は兄の話をあまりしなくなったという。

昨年11月、県遺族会の戦跡慰霊巡拝に参加し、初めてレイテ島に降り立った。兄の最後の地を訪ねることは長年の宿願だった。

「弟の五郎です。聞こえますか」。現地での慰霊祭で、兄に呼びかけた。追悼のため、童謡「ふるさと」を歌った。

この日の追悼式での献花は自ら希望した。「戦争になったらおしまい。穏やかな世の中であるよう、兄の分まで祈り続けます」（辻村周次郎）

NHKの「731部隊」番組、中国で反響呼ぶ

日経新聞 2017/8/15 22:54

【北京＝永井央紀】NHKが13日夜に放送した旧日本軍「731部隊」に関するドキュメンタリー番組が、中国で反響を呼んでいる。中国国営中央テレビは15日昼のニュースで「細菌兵器や人体実験に関する兵士の証言テープを公開し、残忍な犯罪行為を異例にも認めた」と紹介。中国外務省の華春瑩副報道局長は記者会見で「真相を明らかにする日本の知識人の勇気を称賛する」と語った。

中国のインターネット上では「歴史を直視した」と評価する声がある一方で「報道の自由がある国がうらやましい」と中国の報道規制に批判の矛先を向ける人もいた。

日本政府は731部隊の存在は認めているものの、具体的な活動内容については「資料がない」として認めていない。

「ホルマリン漬けの子」少年の衝撃 731部隊で見習い 朝日新聞デジタル北沢祐生 2017年8月15日 15時40分



第11回平和のつどい（千曲市男

女共同企画推進連絡協議会主催）で講演する清水英男さん＝千曲市、7月22日

15日で戦後72年。今夏も各地で、戦争体験者が語り部となっている。当時、10代の少年は、過去を直視し、歴史と向き合うことの大切さを訴えた。

旧満洲（中国東北部）で細菌兵器の開発を進めていた旧日本軍の「731部隊」。長野県宮田村の清水英男さん（87）は1945年3月、14歳で見習い技術員として入隊した。

頭頂部から体を真っ二つに切断された女性や、母胎の中にいるままの胎児、凍傷実験後とみられる乳児……。そんな人体の標本を見た。「腰が抜けるような」衝撃を受け、寝ても夢に出てきて、うなされた。

「戦後、70年以上黙ってきたが、ホルマリン漬けの瓶に入っていた子どもたちのことが忘れられない」。昨年、こ

こでの体験を初めて人前で語った。

安保法制や特定秘密保護法など、今の政府は、過去の戦争責任を省みず、また軍国主義に戻るのではと懸念している。戦争の犠牲になるのはいつも市井の人たちだ。「二度と戦争を起こさない」。若い人たちにこそ考えて欲しいと願う。
(北沢祐生)

長き沈黙…731部隊 元教師、父が残した証言伝える 朝日新聞デジタル伊藤智章 2017年8月15日05時01分



「長き沈黙」を出版した神谷則明さん

■神谷則明さん (かみや・のりゆきさん)

旧日本軍の細菌戦部隊「731部隊」の軍属だった亡父の苦悩の戦後を語って20年余。自身も5年前に脳出血で倒れて高校教師を辞めたが再起し、講演は470回に達した。記録を「長き沈黙」(かもがわ出版)にまとめた。

始まりは36年前。父がこっそり731部隊の新聞連載を切り抜いていた。「(連載をまとめた)単行本を貸してくれ」と言われ、疑念が膨らんだ。鶏肉店の商売一筋の父がなぜ……。

母が死んだ後の1989年、父…

8・14「最後の空襲」、米兵は何を思った

朝日新聞デジタル左古将規 2017年8月15日05時02分



爆撃部隊の同僚とウィリアム・グリーンさん(前列左から3人目)＝1945年6月30日、サイパン島(本人提供)

1945年8月14日。米軍の「最後の空襲」が、大阪市や埼玉県熊谷市、山口県岩国市など複数の都市であった。太平洋戦争に終わりを告げる玉音放送の前日だ。米軍の爆撃隊員が書き残した日記には、降伏の先延ばしがさらなる犠牲者を生んだ模様が記録されていた。

45年8月10日付の日記。「早く寝る。大阪行きのミッションは中止。日本が和平を申し入れ！」



書いたのはウィリアム・グリーンさん(91)＝米ノースカロライナ州。日本への空襲を重ねた「第500爆撃群団」の元技能軍曹だ。関係者のジェームズ・ボウマンさん(69)＝米メリーランド州＝が、団の資料などと共にインターネット上で公開している。

群団の拠点・サイパン島は、第1次世界大戦後に日本統治下に置かれたが、激戦の末、44年7月に米軍の手に落ちていた。爆撃機B29で、敵機の攻撃に対抗する銃手(じ

ゆうしゅ)を担当したグリーンさん。空襲はいつも死と隣り合わせだ。特に45年5月に参加した東京空襲では群団の2機が戻らず、「昨晚仲間を失った。いいやつらだった」と書いている。

島の暮らしもわかる。当時19…

救護被爆、次世代伝える決意 3冊目の手記、来年度にも
朝日新聞デジタル中川壮・46歳 2017年8月15日 08時00分



現在の諫早高

校の中庭。講堂は中庭とブロンズ像の後ろに立つ校舎のあたりにあったとみられる＝長崎県諫早市東小路町



■ナガサキノート：この場所で

諫早市役所の西向かいにある県立諫早高校（同市東小路町）。普段は生徒たちでにぎわう、この中庭のあたりに72年前、旧制諫早中学校の講堂があった。

1945年8月9日夕方。近くに住んでいた馬場すづ子さん（96）＝同市小川町＝は当時、婦人会の会員が集められ、毛布や布団をリヤカーで中学校に運んだ。講堂に入ると、数十人が横たわっていた。長崎に落とされた原爆で負傷した人たち。やけどをしている人の傷口に医師から渡された黒い液を筆で塗った。小学5、6年くらいの男の子

の耳の穴からウジ虫を箸で取った。腰の傷口から腸が飛び出している男性を見た。教室にも負傷者があふれていた。2週間通い詰めたが、水をあげるので精いっぱい。救えない命ばかりだった。

長崎から約20キロ離れた諫早市内には、原爆のあと、多くの負傷者が救援列車やトラックで運ばれてきた。現在の諫早総合病院付近にあった佐世保海軍病院諫早分院だけでなく、旧制諫早中、現在の市役所付近にあった諫早国民学校、肥前長田駅の近くで現在は長田小学校となった長田国民学校などにも収容された。長崎原爆戦災誌によると、諫早市内の病院や医院、学校や寺院など10カ所余りで約2千人が救護された。助けを求め、長崎から歩いて来た負傷者も少なくなかったという。

【続きあり】